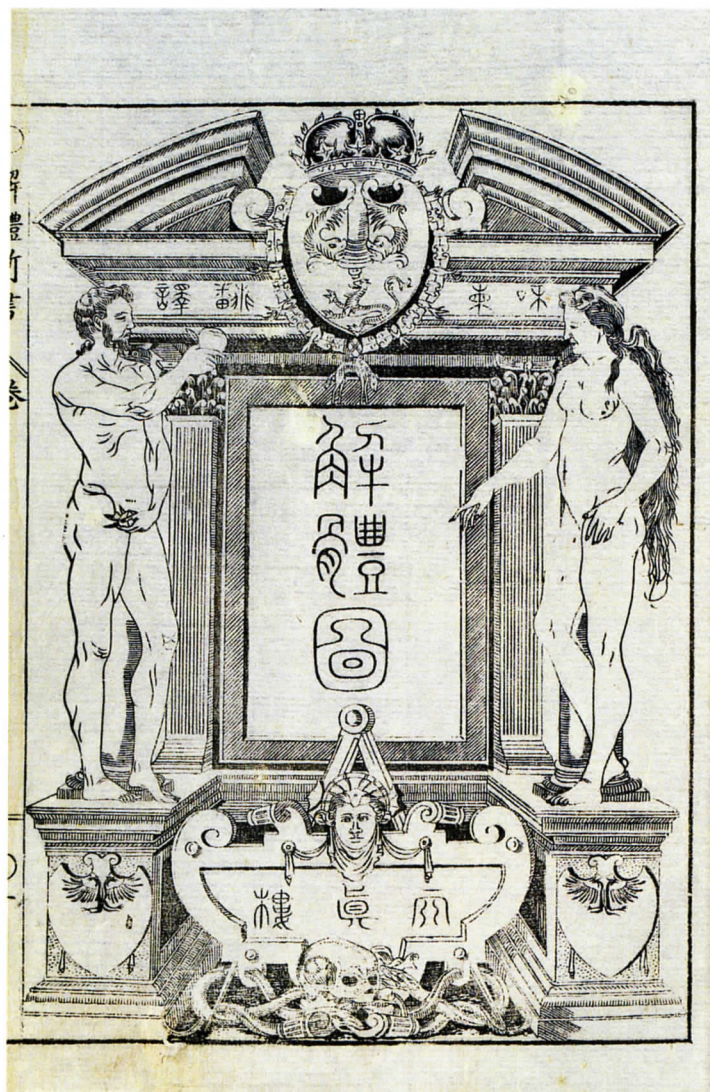

ふくいミュージアム

1988. 3. 31

No.13

福井県立博物館



解体新書 (P 5 参照)

昭和63年度 春の特別展

知られざる古墳時代

—その生産・技術を探る—

昭和63年4月27日(水)～6月5日(日)

古墳時代は、畿内政権を中心に、これと同盟関係をむすぶ地域首長が権力をにぎった時代でした。これら首長の墓である古墳の巨大さ、そこから出土した埴輪や豪華な副葬品は、現在の我々に対しても、その権力の大きさを誇示しています。

しかし、これらの首長の権力は、支配される立場の多くの人々の存在の上に成り立っていたことを忘れてはなりません。米などの食糧を作る農民、日常用の土器を作る人々、副葬品を作る人々、さらに埴輪や古墳そのものを作る人々といった、さまざまな「モノをつくる—生産する」人たちが、実はこの時代をささえていたのです。彼らのなかには、高度な技術を身につけ、専門の集団を形づくっていた人々も少なくありません。

この春の特別展では、古墳時代の「知られざる」側面として、この「生産と技術」にスポットをあてたいと思います。なかでも北陸地方に関係の深い遺跡、遺物をとりあげ、次の5つのコーナーで構成します。



埴形埴輪 (奈良県・富山古墳)

- A-1 はにわが語るもの—はにわと古墳社会—
- 2 はにわ作りのあと
- B-1 玉と石製品の副葬
- 2 古墳時代の玉づくり
- C-1 金・銀・銅の技術
- 2 鉄製品の副葬
- 3 鉄生産のはじまり
- D-1 若狭の塩づくり
- 2 能登の塩づくり
- E-1 古墳出土の須恵器
- 2 須恵器生産のはじまり

大きな埴輪、きらびやかな玉や金銀銅の装身具、舶来の焼きもの須恵器、まだ塩のかおりのしそうな製塩土器など、展示品の数々にふれられて、古墳時代と、古墳社会をささえた人々に思いを馳せていただきたいと思います。

▶重要文化財

金銅装環頭大刀柄頭
(京都府・湯船坂2号墳)



【主な展示資料】

首飾や大刀をつけた埴輪 (群馬県四ッ塚) / 金製耳飾 (兵庫県富山古墳) / 金銅製帯金具 (国宝・埼玉県稲荷山古墳) / 金銅装環頭大刀 (重要文化財・京都府湯船坂2号墳) / 玉作りの遺物 (重要文化財・島根県出雲玉作遺跡) / 塩づくりの土器 (大阪府小島東遺跡他各地) 等

夏の共催展

国立民族学博物館所蔵

神々のかたち—仮面と神像—

この展覧会は、大阪の国立民族学博物館が所蔵する世界各地の民族の仮面と神像約 210点を展示するもので、会期は7月21日(木)から8月31日(木)までとなっています。

世界各地の民族文化の特徴が、最も明瞭にあらわれるのは祭祀と芸能の分野であり、その行事の核として重要な役割を演ずるのが仮面であり、神像であるといえるでしょう。生活用具や道具などとは異なり、何かに用いるという規制がなく、表現の自由さが保障されており、民族の美意識が最大限に発揮されているからです。

仮面や神像は人間が神に捧げたり、悪霊をとり祓うためのお祭りの舞や踊りに使われた聖具で、仮面は動く神をあらわし、神像は人々の祖先神を象徴し

ています。

展示作品はオセアニア、アフリカ、アジア、アメリカなど世界各地から網羅していますが、従来とかく近代文明からとり残された地域と考えられていた西アフリカや、バブア・ニューギニアなどに素晴らしい文化遺産として仮面や神像が伝えられているのに驚かされます。

展示作品の中で目立つものとしては、北アメリカの代表的な像であるトーテムポールやメキシコの蜘蛛の仮面、ネパールの華やかな色彩の仮面などがあります。またアフリカ西海岸地域のものは、木の素材そのものの質感を生かし、近代の抽象彫刻を思わせる造形美を見せています。

これらの仮面や神像をそれぞれの民族の信仰や生活などと結びつけて考えると共に、優れた造形感覚や神秘性に焦点をあてるのも一つの見かたではないでしょうか。

この展示は国際化時代を迎えて、世界の民族文化を理解していただく絶好の機会であると思います。

『福井県立博物館総合案内』の発刊

県立博物館の新しい案内書が発刊されましたのでご紹介します。この本は、B5版、80ページ(うちカラー52ページ)で、当館の常設展示をわかりやすく解説したものです。解説文は、小・中・高生にも理解できる表現を用い、約2,000点の展示資料のなかから、146点の資料を選び、カラー写真を多用して楽しく読めるように工夫してあります。

この案内書は、財団法人日本生命財団の助成をう



贈呈式の様子

けて発刊したものです。

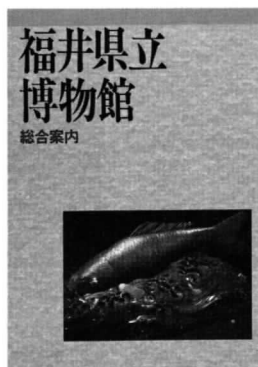
同財団は、経済、社会、文化、教育、福祉、科学技術等の分野における有意義な事業や研究に対する助成を行う団体で、各種の事業を行っています。博物館総合案内出版助成もその一つです。

贈呈式は、11月26日、県庁の知事応接室で行われ、財団の望月専務理事から栗田知事に目録が手渡されました。

贈呈された案内書3,441冊のうち、441冊は県内の小、中、高等学校、図書館等に寄贈されました。残りの3,000冊は博物館で、一冊750円で販売しています。この販売代金は、完売後の増刷の費用に当てる予定です。

ひろくご活用いただき、福井県の歴史と文化を理解するのに役立てていただきたいと思います。

なお、郵送による販売(送料一冊250円)も受付けております。



研究ノート

よ ほ し ぎ
教賀市山の烏帽子着

—「初午」と「直し」—

I.

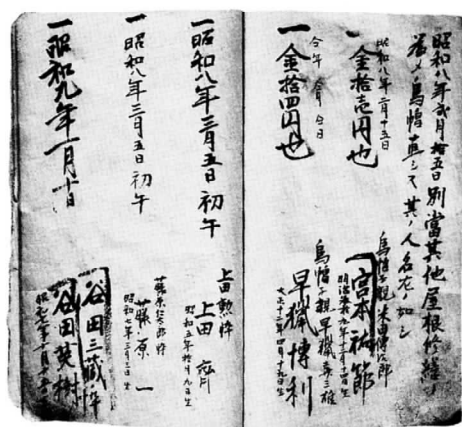
教賀市山区の氏神稻荷神社の祭祀は、宮座の組織によって行われている。この宮座の成員を諸人という。烏帽子着はこの諸人への仲間入りをするための入座儀礼であり、烏帽子着をすませた者は、『諸人座舗並之帳』（写真）に記名される。

烏帽子着には、2通りの方法がある。ひとつは正式の作法（後述する）によって『諸人座舗並之帳』に記名される方法。こうして記名された者は、初午祭の当番をつとめなければならない。一方、いくらかの金を納めることによって記名され、初午の当番が免除される方法がある。前者を「初午」、後者を「直し」とよんでいる。初午の当番をつとめるには供物や直会の酒食の準備等に多くの出費を必要とする。経済的にこの出費に堪えない者は、「直しにしてくれ」と頼むのだといわれている。

ところで現存の『諸人座舗並之帳』によると明治11年から昭和52年までの100年間の烏帽子着の人数342名のうち「直し」は161名にものぼる(下表参照)。経済的弱者の救済の方法という理由だけでは説明できない。むしろ半数近くの者が「直し」にしなければならない必要があったのだと思われる。以下この点について、考察をすすめていきたい。

II.

烏帽子着は、区内に生れた長男あるいは養子、婿



『諸人座舗並之帳』

養子で将来戸主になる者が受ける。次三男以下については、区内に分家し所帯をもてば受けられる。また、移入戸に対する制限もない。

正式な「初午」の烏帽子着の方法は、1月10日のオコナイか旧2月初午の初午祭の座に、すでに烏帽子着を受けている父親か、なければ祖父あるいは親戚の者を烏帽子親に頼み、ともに出席し、烏帽子着を希望する旨を申し出て、二十人衆の頭である一老から盃をうけ『諸人座舗並之帳』に記してもらう。烏帽子着を受ける年齢に規定はなく、各人の自由であるが、この記名順によって長老衆である二十人衆へ上がる順番がきまるので、長男が生れると先をあらそって「烏帽子を着せた」ものだという。表をみても「初午」181人のうち86人と半数近くが2才までに烏帽子着をうけており、10才まででは7割に達する。

こうして烏帽子着を受けた者は、記名順にまわつ

烏帽子着を受けた年齢(満年齢)	初 午							計	直 し							計	合計
	0~2	3~5	6~10	11~20	21~30	31以上	不明		0~2	3~5	6~10	11~20	21~30	31以上	不明		
明治11年(1878)~明治20年(1887)	6	5	1	0	0	0	5	17	1	8	2	0	0	0	13	24	41
明治21年(1888)~明治30年(1897)	5	2	0	0	0	0	2	9	1	4	1	2	1	0	9	18	27
明治31年(1898)~明治40年(1907)	16	4	0	2	3	0	3	28	5	1	1	3	4	0	3	17	45
明治41年(1908)~大正6年(1917)	16	0	1	2	3	0	3	25	3	2	0	3	6	0	2	16	41
大正7年(1918)~昭和2年(1927)	12	3	0	5	2	0	1	23	2	4	2	1	4	0	7	20	43
昭和3年(1928)~昭和12年(1937)	13	5	2	1	1	0	2	24	3	1	2	1	4	2	3	16	40
昭和13年(1938)~昭和22年(1947)	2	4	2	3	1	0	2	14	0	0	1	0	0	1	5	7	21
昭和23年(1948)~昭和32年(1957)	9	3	3	4	4	0	3	26	1	0	2	0	7	1	11	22	48
昭和33年(1958)~昭和42年(1967)	7	4	2	0	2	0	0	15	0	1	1	1	10	2	2	17	32
昭和43年(1968)~昭和52年(1977)	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	3	0	1	4	4
合 計	86	30	11	17	16	0	21	181	16	21	12	11	39	6	56	161	342

山区烏帽子着人数集計表

てくる初午祭の当番をつとめる。農地改革以前は宮田^{みや}があり、当番になると一年間耕作し、収穫は御供米その他費用の一部にあてられた。当番を無事つとめおえると、初午祭の神事の座において、一老から当揚^{とうあげ}の盃を受ける。また、翌年の当番の者は、当受の盃を受ける。

神事のなかの盃事の儀礼として残っているのが、この烏帽子着の方法と当受、当揚は古くからの仕来りであると思われる。

III.

次に「直し」についてみる。現在は各自が「直し」にしてほしいことを二十人衆に申し入れ、二十人衆が定めた金額を納めて、『諸人座舗並之帳』に記してもらう。オコナイや初午祭のときでなくてよく、随時受けられている。しかし戦前においてはその機会は限られていたようである。戦前の「直し」の記録を『諸人座舗並之帳』によってみると、いずれも数人ずつかたまて記されており、そこには「御宮修繕ニ付直し」とか「稲荷御本社ふきかゑニ付直し」などと記入されている。神社の修繕や屋根の葺替等の費用のために何人かがいくらかずつ出しあっているのである。「昔は、神社や鳥居の改修などのために臨時に費用が必要になったとき二十人衆は、直しをすすめて金を集めたこともあったらしい」と話してくれた人もあったが、実は戦前の「直し」はほとんどすべてこの方法であったことは注目すべき点である。また、これが二十人衆からのほたらきかけであったことが重要である。費用徴収の方法なら、諸人全員に均等割で負担させるなど他の方法もあったと思われるのに、なぜ「直し」の方法を選んだのか、その理由を考えなければならない。

IV.

当番制による祭祀の経費負担（当屋制）は、すべての成員が平等につとめることが、こうした宮座の組織の原則である。ところで、山区の宮座は、先にも述べたように、家格等による加入制限はなく、区的全戸が加入できる「村座」型の宮座である。また、山区の戸数は現在 110戸であり、明治11年でも66戸あった。宮座を構成する全戸がその1代に1度ずつ当番をつとめることができるためには、その戸数はだいたい30戸が限度であると思われる。66戸もあればその約半数は当番をつとめることができず

終わってしまう。「当番をせんと死んでしまうのをクイネゲやゆうて嫌うたらしい」という古老の言葉もあった。したがって「直し」の方法は、「初午」の者が増えすぎて当番をつとめずに死んでいってしまう者がないように調節するために必要だったと思われる。

当番は昭和5年から2人ずつつとめるようになっていたが、これも同様の理由からである。昭和4年の当番は明治36年生れのS・K氏⁽²⁾で、烏帽子着は明治37年に受けている。当番がまわってくるまで25年かかっているが、以後はさらに長くなる傾向にあった。昭和5年現在でまだ当番をつとめていない「初午」の人数は61人にも達していた。以後「初午」の烏帽子着を受けたものは当番をつとめるまでに60年以上またなくてはならない状況となったために、昭和5年から当番は2人ずつに変更したのである。

なお、諸人は『諸人座舗並之帳』の記載順によって二十人衆へあがっていくのであるが、この場合には「初午」と「直し」の差はない。「直し」は当番をつとめるのと同等のつとめを果たしたものととして平等に二十人衆となる権利を有しているのである。

V.

烏帽子着は、宮座加入の手続きであると同時に、一面においては当番をつとめる者を確保する手段でもあったといえよう。ところが、実際の加入者は、その必要人数をオーバーしてしまう。このオーバー分を調節する役割を、「直し」の方法が果たしていたのである。

山区の宮座組織の発生当初から、この「直し」が行われていたとは考えがたい。記録の上ではさかのぼり得ないが、当番をつとめた者もつとめない者も平等な権利を有することが、古くからのこととは思えない。「直し」は、山区の戸数増にともなう諸人の人数の増加という時代変化によって生みだされたものであろう。

宮座における当屋制とそのしくみについてみていくとき、宮座の構成戸数との関連を考える必要がある。特に、「村座」の形態をとる宮座にあっては、戸数の増加による変化に注意したい。（田中敏博）

【注】(1) 現存の『諸人座舗並之帳』は明治4年以降のものである。

(2) S・K氏は、このとき当番をつとめるために100円用意したという。なお、昭和3年に行われた「直し」の際の直し金は、1人につき20～30円であった。

収蔵資料の紹介

解体新書 (全五冊)

解体新書は日本における西洋の人体解剖図の草分けであり、人体を科学的な原理からとらえたものとして高く評価されています。

この解体新書をオランダ語の原書から翻訳したのが杉田玄白を中心としたグループです。玄白は享保18年(1733)小浜藩医の子として江戸で生まれ、父について修学し、後に自らも藩医となりました。

玄白が解体新書の翻訳を思い立ったのは、明和8年(1771)3月に小塚原刑場での腑分け(解剖)に前野良沢らと共に立会い、オランダの解剖書の図と現物とがあまりに良く合致しているのに驚いたのがきっかけといわれています。そしてこの時に手にしていたのがオランダ語の解体新書です。

翻訳は明和8年に着手してから3年半あまりの年月を費して、安永3年(1774)によく完成しました。何しろ玄白自身はほとんどオランダ語を解せ

ないため、前野良沢のオランダ語の知識にたより、非常に苦勞したようですが、グループ全員が医者であり医学上の熱意にあふれていたことが、この大事業の完成に結びついたようです。

この解体新書の挿絵は秋田角館の藩士、小田野直武が描いています。直武は初め狩野派を学び、安永2年に鉾山開発のため江戸から招かれた平賀源内によって西洋画法を伝授されました。同年12月には江戸へ上り司馬江漢らとも交わり、写実的な洋風画法に磨きをかけています。挿絵を描いたのはこのような時期で、原著では銅版画で描かれていますが直武は木版画を使って模写しています。精巧さの点では銅版には及ばないまでも、医学の上での観察と検証という近代科学を成立させるには、挿絵の正確な表現力は不可欠といえるでしょう。

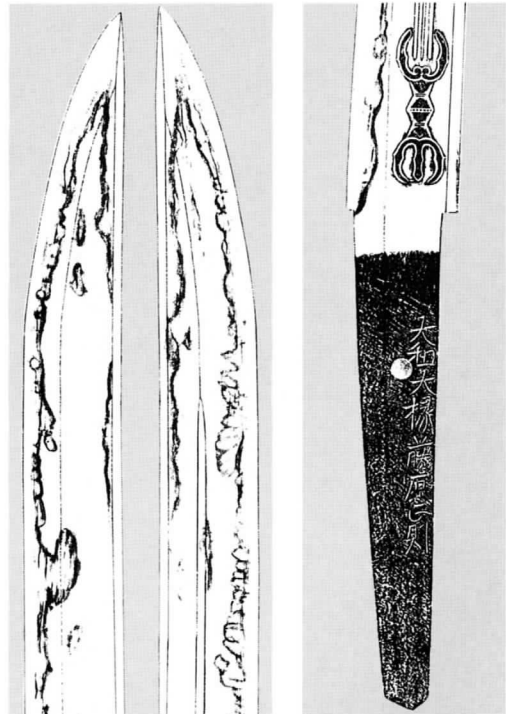
解体新書の誕生は医学のみならず、我国における近代的な学問の成立にも大きな意味を持っており、歴史的にも貴重な資料です。(貴志)

刀(銘)大和太掾藤原正則

刃長73.0cm、反り2.0cm。片切刃造、庵棟、身幅広く、大切先。鍛は板目肌立ち、地沸つき、棟焼頻りにかかる。刃文は互の目交じりの大乱れで、足・葉頻りに入り、砂流しかかる。帽子は乱れ込み、突き上げて掃きかける。彫物は表に三鉾剣、裏に鎬樋に爪。茎は生ぶで先入山形、鑓目大筋違い、目釘孔1。

正則は三条吉則の末葉といい、本国を丹後宮津と伝えるが、越前新刀を代表する刀工の一人であり、慶長頃をはじめとして同名数代におよぶ。この刀は初代の最高傑作で、片切刃の形状や大乱れの刃文に、初代康継との密接な関係がうかがわれ、その門業と考えてよいと思われる。

(村野)



郷土の人物シリーズ

いく え の おみ あずまんど(ひと)
生江臣東人

福井市の東部篠尾地区には、県下最大の酒生古墳群（4～7世紀）や、北陸最古の寺院の一つ篠尾廃寺があります。これらは、飛鳥～平安時代の史料に登場してくる「生江氏」の墓であり氏寺であるという説があります。その生江氏の人々の中でも、最も重要な人物が生江臣東人です。

彼の名前が登場するのは、天平勝宝元年（749）のことで、造東大寺司（東大寺を造営・維持していくためにおかれた政府の機関）の史生（ししょう＝事務官）をつとめ、同7年（755）には、既に越前国足

羽郡の大領（郡長官）になっています。東人は一貫して大和東大寺のために働いた人物で、大領となる以前には、足羽山の西方、道守庄で、自ら田100町をひらいて、東大寺に寄進しています。また、大領となつてのちは、坂井郡の桑原庄の経営なども任されています。

このように、東大寺が越前国に荘園を占定するのに重要な役割を演じ、この地に東大寺領荘園の約3分の1がおかれた一つの理由となつたのが、東人の存在だったので。奈良時代の越前関係の人物の中で最も活動的だった生江臣東人と、ちょうど同じ頃越前国内で唯一寺院規模を拡大しつつあつた、篠尾廃寺の動向がオーバーラップすることが「篠尾廃寺＝生江氏の氏寺説」の大きな根拠となっています。

（久保）

—ビデオライブラリーから—

若狭の寺

福井県の南部、若狭地方は優れた仏教美術の宝庫で、特に小浜は「海のある奈良」といわれ、日本海側にあってその文化水準の高さを誇ってきました。

このビデオはその小浜にある、羽賀寺、明通寺、妙楽寺などの密教寺院を紹介するものです。

羽賀寺は本尊十一面観音立像が、そのエキゾチックな雰囲気でもありにも有名となっていますが、本尊のみならず、奥州の阿部氏とのゆかりを示す縁起や、重要文化財に指定されている、密教建築のさまをよくあらわす本堂、さらには数多くの仏画をはじめとする寺宝を今に伝える、若狭を代表する寺です。

また国宝の三重塔をのこす明通寺は、石段に続く山門・本堂・塔が、大木につつまれて配置される密教寺院で、本尊薬師如来の脇侍に、全国でも珍しい深沙大将を置く、若狭では大きな寺院です。さらに当寺は、この小浜の地にふさわしい、海彦山彦の話を描く、「彦火々出見尊絵巻」を有することでも著名です。

このような歴史が古く文化財の豊富な寺々をこのビデオでは、移りゆく四季の風情の中に写し出しています。若狭の寺々は何よりも、その風土によって育まれ、伝えられてきたものと思われるからです。

（長坂）

雪の中の暮らし

鈴木牧之の『北越雪譜』は江戸時代の雪国の生活を伝える本として、多くの人に親しまれています。暖地の人の雪に対する憧れも影響しているかもしれませんが、しかし雪国の生活は鈴木牧之も言い、私達自身が身をもって知っているように、決して楽なものではありません。

雪の影響は平地地よりも山間地でより大きかったです。奥越の山間地では福井の人ささえ驚くほどの雪が降ります。社会の変化で廃村になったところが少なくありませんが、つい最近までこれらの村で人々が暮らしてきました。雪に苦しむと言っても現在と、過去ではかなりの違いがあるはずで。

この番組では伝承的な冬の暮らしを、勝山市の北谷に取材して制作しました。内容は、1. 雪に備える（家屋の構造と大量の燃料、雪がこい、漬物）、2. 冬の屋内の仕事、3. 雪降り、雪道踏み、4. 勝山市北谷町谷のお面様の行事、5. その利用、6. だれと春の訪れ。

もちろん短時間の映画では雪に耐え、雪を利用してきた生活のすべてを伝えることはできません。それでも身近な問題を扱っているためか、よく見ていただいている番組の一つです。

（坂本）

63年度 春夏の行事

特別展 4月27日(水)～6月5日(日)

知られざる古墳時代

—その生産・技術を探る—

* 講演会 「古墳時代の生産と王権」

5/29(日) 大阪大学教授 都出比呂志 先生

共催展 7月21日(木)～8月31日(水)

国立民族学博物館所蔵

神々のかたち—仮面と神像—

* 講演会 「アフリカの仮面文化」

8/7(日) 国立民族学博物館助教授 端 信行 先生

* 自然教室 恐竜時代の動植物

4/23(土) 手取層群の植物化石

4/30(土) 恐竜と手取湖

* 考古教室 古代の技術

5/14(土) 玉の技術

5/21(土) 銅と鉄の技術

6/4(土) 土器・陶器の技術

* 民俗教室 ふくいのまつり～夏から秋～

8/20(土) 田の神まつりと農耕儀礼

8/27(土) 祇園会と夏祭り

9/3(土) 盆の諸行事

9/10(土) 獅子舞のでるまつり

* 地質野外観察会 5/3(火) —白峰村—

* 海岸植物観察会 5/8(日) —雄島—

* 学習会 草木染め 6/12(日)

* 学習会 化石のクリーニングと整理 7/27(水)

ミュージアムシアター

4/24(日) コロンブス・シュリーマン・アルキメデス

5/5(木) 古墳から見た大和朝廷・大谷古墳・継体天皇の謎

6/26(日) 武家社会と鎌倉文化・室町時代の社会と文化・安土桃山の社会と文化

7/24(日) エジソン・ライト兄弟・ベル

8/14(日) 男鹿半島のナマハゲ・ボゼのでるまつり

9/25(日) 富士山・地底の山脈で発見された油田

- * 印のものは申し込みが必要です。
- 内容・日程等を変更することがあります。
- お申込み・お問い合わせは学芸課まで。

友の会会員募集!

昭和63年度友の会会員を募集します。

今年度から「家族会員」が新設され、家族ぐるみで会員になることができるようになります。ぜひご利用ください。

★特典

博物館と友の会の事業が事前に案内されます。

博物館常設展示を何度でも観覧できます。

(家族会員は一度に4名まで)

春秋の特別展の無料入場券が送付されます。

(家族会員は2枚)

友の会会誌「Myミュージアム」が送付されます。博物館広報誌「ふくいミュージアム」が送付されます。

★会費

家族会員 5,000円

一般 2,500円

大学生・高校生 2,000円

中学生・小学生(Jrサークル) 1,000円

★期間

昭和63年4月1日～昭和64年3月31日

★入会の方法は

入会申込書(博物館にあります)にご記入のうえ、会費は次のいずれかで納入してください。

○直接博物館内事務局へ納入(申込書を添え)

○現金書留で郵送(申込書を同封)

○郵便局より振替で郵送(申込書は別送)

口座番号 金沢5-23379

口座名称 福井県立博物館友の会

☆入会の手続きが終了しますと、会員証をお渡しします。

資料収集に御協力下さい

ふくいミュージアム No.13 1988.3.31

編集 福井県立博物館

発行 福井市大宮2丁目19-15
〒910

☎ 0776-22-4675(代)

印刷 出口印刷株式会社